

上述の時期の華北に関する碑刻（石刻）史料が続々と公刊されている。王朝の正史や著名な文人の文集などの文献史料が、政治・外交・戦争など国家的事柄を記述の主な対象とするのに対し、碑刻史料には地域社会の様々な事柄が記録され、数量も豊富である。さらに、未発表の碑刻が華北には数多く現存する。これら新史料により、女真・モンゴルなどの外来民族に支配された時期の、多民族・多文化が混在する多元的社会の様相が徐々に明らかになり、中国史の空白領域が克服されようとしている。それはまた、現在「中国」の民族・社会構造の成り立ちが再検討されることも意味している。

歴史学に取り組み理由は、個々人により千差万別である。しかし、現代社会が直面する諸問題に対し、歴史学が貢献すべき点は何なのか、その課題への自問は常に行われるべきだろう。一九九〇年代から急激に表出した民族問題は、とくに中国において近年激しさを増しているが、多くの場合、対立の根本には歴史観が関連している。史

料から読み取れる歴史的経緯を客観的に提示することが求められているが、歴史学がその責務に十分に答えられているとはいえないのが現状である。新たな史料と新たな課題を前にして、歴史を学ぶ意味は従来以上に大きくなっている。

歴史のなかの《事実》と《虚構》

蝶野 立彦

一九世紀のヨーロッパで成立した近代的歴史学の研究方法論では、歴史研究者の主観的臆断や脚色によって歴史認識が歪曲される危険を絶えず意識しつつ、そうした臆断・脚色・歪曲を慎重に排して、「史料に即した過去の事実の再構成」をおこなうことが一貫して重視されてきた。即ち、近代的歴史学においては、厳密な史料批判と史料操作によって歴史認識を史料的基盤に基礎づけるとともに、研究史的反省を通じて「研究者自身の視点のイデオロギー的制約」

を常に検討し続けることこそが、「歴史的事実」を様々な「虚構」から峻別するためのもっとも重要な基礎的作業である、と見なされてきたのである。ヨーロッパの近代的歴史学の祖と目されるL・ランケがW・スコットの歴史小説を批判しつつ自らの歴史家としての立場について語った言葉——「私は：虚構から身を背けて、私の著作においてはあらゆる創造や創作を避け、厳密に事実に即しようという考えを固くした」——に端的に示されているように、一九世紀以降の多くの歴史家たちは、歴史を題材にして虚構の物語を創作する「歴史小説家」の仕事と自分たち「歴史家」の仕事との違いを強調することによって、「史料に即した過去の事実の再構成」という歴史学的課題の固有性を主張してきた。そして、ヨーロッパの近代的歴史学が古代・中世・宗教改革期のキリスト教的・救済史的な歴史叙述——即ち、《神の摂理》という宗教的・神話的な物語の枠組みのなかに個々の歴史的出来事を嵌め込んでゆく歴史認識の方法——に

対する批判を通じて成立したことを鑑みるならば、このような近現代の歴史家たちの自己認識は、「過去の事実の解明」の学としての近代的歴史学の存立にとって必要欠くべからざる前提条件であったと考えられる。

このように、「歴史学的な歴史認識」と「歴史を題材にした虚構の物語」を峻別することがヨーロッパの近代的歴史学における自明の前提となっていたのは対照的に、「史料そのものに含まれる虚構の要素」を歴史研究のなかでどのように取り扱うべきか、という問題に関しては、かならずしも明確なコンセンサスは形作られてこなかった。たとえば、過去に記された年代記・行政文書・出版刊行物等のなかに含まれる「筆者の作り話・捏造・脚色・誤解などに起因する記述」は「過去の事実の歪曲をもたらすがゆえに歴史学的分析から排除されるべき要素」なのか、それとも、それらもまた、「過去の事実の解明に資する要素」として取り扱われるべきなのか、もし後者の立場を取るならば、具体的にどのような

視点・方法に依拠してそれらの記述を分析すべきか——こうした問題について、ヨーロッパ史研究の分野では、今日に至るまで、充分に説得力ある（そして多くの研究者が共有しうるような）立場は示されてこなかったように思われる。

ヨーロッパ史研究の分野で、「史料に含まれる虚構の要素」を歴史学的分析の対象とする際に、しばしば用いられてきたのは、そうした要素を「その時代の人々の心性の表れ」として分析する手法だった。こうした方法論の先駆者たるM・ブロックは、サン・シモンの『回想録』や中世の聖人伝に多くの「捏造された情報」が含まれているとしても、それらは「太陽王の宮廷における一大領主の心性」や「それらが書かれた時代に固有の生き方や考え方」を解明するための史料として役に立つ、と述べている。³だが、こうした心性史的なアプローチではしばしば、「特定の史料のなかの筆者の主観的記述」が——一般化の根拠を欠いたまままで——「その時代の人々の典型的な心性」と同一視され、また、それぞれの時代の具

体的な歴史的文脈から切り離された形で「人々の心性の領域」が措置されてしまう傾向が否めなかった。これに対して、一九八〇年代以降に盛んになってきたのは、「（行政文書や出版刊行物のなかに含まれる）作り話・捏造・脚色などが同時代の社会にいかなる作用を及ぼしたか」という点に着目するアプローチであり、一部のヨーロッパ史家たちは、一六世紀フランスの裁判で用いられた「恩赦嘆願書」や宗教改革期ドイツの「民衆プロパガンダ用のパンフレット」、あるいは三〇年戦争期の「自称預言者による幻視の記録」のなかに見出される「作り話」や「事実の脚色」に着目しつつ、それらの「虚構性を帯びた語り」が同時代の社会にいかなる作用を及ぼしたか、という問題を——具体的な事件の経緯のなかで——分析することによって、それぞれの時代の当該地域の社会や文化の実像を解明しようと試みている。⁴各時代・地域の社会及び文化の分析に際して、「歴史的事実」と

「史料に含まれる虚構の要素」との相互関係に目を向けることは重要であり、今後、そうした観点から様々な新しいアプローチが試みられるであろう。

(1) L・ランケ、林健太郎訳『ランケ自伝』岩波書店、一九六六年、八四頁。

(2) 佐藤真一『ヨーロッパ史学史』知泉書館、二〇〇九年、二三九頁を参照せよ。

(3) M・ブロック、松村剛訳『歴史のための弁明』岩波書店、二〇〇四年、四五頁。
C・ギンズブルク、上村忠男訳『糸と痕跡』みすず書房、二〇〇八年、九一―一〇頁も参照せよ。

(4) N・Z・デーヴィス、成瀬駒男／宮下志朗訳『古文書の中のフィクション』平凡社、一九九〇年；R.W. Scribner, *For the Sake of Simple Folk*, Cambridge, 1981; D.W. Sabean, *Power in the Blood*, Cambridge, 1984.

早稲田で考古学を学んで

小野 本 敦

私は本学の考古学専攻を四年前に修了し、現在、埋蔵文化財専門職員として自治体で勤務しながら大学院博士後期過程で学んでいる。今回の発表者の中では異色の経歴であるが、私の考古学専攻での生活・現在の仕事・またなぜ大学院に戻ってきたのかなどを記すことで、考古学の魅力を少しでも感じてもらえたら幸いである。

歴史学を志したことに何か大きな契機があったわけではない。祖父が小学校の社会科教諭をしていたことや、奈良県に親戚がいてよく遊びに行った事などが漠然とした歴史に対する興味を育んだのだと思う。運よく早稲田大学に進学できたのも、私が受験した当時は受験科目が国語と英語と小論文だけで科目数が少なかったからである（受験の日本史は苦手であった）。

専修進級時には日本史か考古学かで悩ん

だが、結局、「発掘」というものを経験してみたいという単純な理由で考古学を選んだ。私の遺跡現場デビューは、三年生に進級する春休み、先輩に紹介してもらった、大阪市立大学によるメスリ山古墳の測量調査である。奈良県にあるメスリ山古墳は墳長二三五mの古墳時代前期の大型前方後円墳である。測量調査とは学生数人で班を作り、手分けして測量図を作成していくのだが、最後にすべての図面を重ね合わせ、一個の古墳の図面が完成した時には、まるでこの古墳を制圧したかのような達成感を覚えた。この調査が古墳時代を本格的に勉強するきっかけになった。

大学院修士課程の時には、東京都狛江市にある土屋塚古墳の発掘調査と報告書作成の機会を与えていただいた。土屋塚古墳は墳丘四〇mほどの古墳時代中期の円墳であり、墳丘には埴輪が樹立されていた。近畿地方の大型前方後円墳とは比較にならない小規模な古墳だが、この古墳が調査されるまで、東京の多摩川中流域には埴輪をもつ